

# 科学史技術史通信

特定非営利活動法人  
科学史技術史研究所  
田中・山崎・飯田・菊池・道家文庫  
No.27

2015.12.29

165-0027 東京都中野区野方1丁目29番1-B101

Website URL: <http://ihst.jp/> e-mail: [ihst@ihst.jp](mailto:ihst@ihst.jp)

## 目次

カリフォルニア大学の戦時動員体制づくりに  
おける研究契約の役割

日野川静枝・・・1

科学史技術史の動向

第62回日本科学史学会年会 10

感想 奥田謙造 11

## カリフォルニア大学の 戦時動員体制づくりに おける研究契約の役割 The University of California and the Mobilization of Science for WW II —the Role of Research Contract—

日野川 静枝

(拓殖大学人文科学研究所客員研究員)

### 1. はじめに

私はこれまで、科学史・技術史の分野で研究してまいりました。特に、1930年代初頭にカリフォルニア大学の物理学者 Ernest O. Lawrence (1901~58)が発明した、原子核研究の手段である加速器サイクロトロンの開発過程を調べてきました。同時にまた、このサイクロトロンが諸外国においてどのように開発されてきたかも、調べてきました(注1)。これらの研究

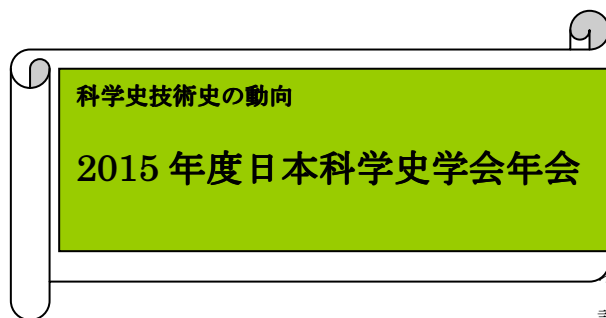
は、サイクロトロンこそが巨大科学の起源ではないかと考える私の問題関心からなされたものです。

今はまだ暫定的にですが、巨大科学の特徴は次の3点にまとめられるのではないかと考えております。①先端技術を駆使する装置の開発—研究現場と企業の技術開発との連携、②莫大な研究資金—軍や政府との研究契約や、巨大財団などからの投資の呼び込み、③研究者の組織化・作業場内分業の徹底—プロジェクトやチームを離れて、研究者は研究継続が不可能となります。こうした巨大科学の特徴から、私が一番大切なものと考えているのが③であり、それは研究者自身の自立性の喪失の問題です。「科学とは人類の知的遺産」と考えている私は、①から生ずる産学共同、②から生ずる軍学共同、その結果、生ずるだろう企業機密や軍事機密が科学研究の現場を覆うことを大変危惧しております。科学が人類の知的遺産でありうるためには、いつでも、誰でもその新しい知見に接することのできる公開の原則が大前提です。しかし、この大前提は研究者自身の意志だけでは実現できず、科学者でもない技術者でもない市民の意志が必要不可欠と考えております。なぜなら、企業機密や軍事機密と真つ向から対立する研究成果の公開です。研究者自身の自立性が喪失されているような科学研究の現場から声があがるとは、考えにくいのではないのでしょうか。巨大科学がいかなる条件に置かれるべきかを真剣に考えることは、それは科学をいか

なるものとしてとらえるかという科学観によっても規定されておりますが、市民一人一人の責務であろうと私は考えております。市民の力なしには、人類の知的遺産としての科学が存続不可能であるからです。

## 2. 科学研究開発局との研究契約： 1945年6月30日現在（注2）

・・・以下、省略／・・・全体は、  
会員に配布しています。お読みになりたい方は、入会ください。



2015年5月30~31日 大阪市立大学にて第62回日本科学史学会の年回総会が開催された。今回の同学会年会にはいくつかの顕著な特徴がみられた。

一つには、シンポジウムが大会主催者企画のものと同企画のもの併せて以下のように6本と多かったことである。

主催者側の記念シンポとして、

\*「科学者と経営者の倫理と社会的責任」、  
一般シンポとして

\*「ラッセル・アインシュタイン宣言」60年：  
ビキニ事件と冷戦期科学者

\*脱成長時代の日本の科学技術と社会

\*渋川春海没後300周年：渋川春海研究の  
新展開に向けて

\*戦後日本の大学における物理系の学術研究体制を考える一名古屋大学・物理学教室の科学・思想・制度・運営一

\*原発事故後の放射線健康影響問題～福島県での小児甲状腺がん多発とチェルノブイリの歴史的教訓\*\*

これらは、シンポのタイトルが示すように、現代における科学者の課題を社会や倫理との関連でとらえるものが多く、科学史研究者は現代社会の社会的政治的課題に対して、どのような立ち位置で対峙しているのかを鋭く問うものが多く、示唆に富むものであったといえよう。

もう一つの特徴は、限定報告数ではあるが、報告手の報告に、一般報告より長時間を割り当て、討論重視の場を設けたことである。限られた時間内で意を尽くすことも学会発表には求められるが、他方、学会の機能として、議論や研究の多面的な発展の場をつくることも重要であり、今回の試みが意欲的であったことを評価したい。（木本記）



シンポ「名古屋大学物理学教室の科学・・・学術研究体制」でのパネリストと益川敏英氏



## 2015年度 第62回日本科学史学会年会の所感・感想

奥田 謙造・・・略・・・